

◆【海員随想】B I S K R A号航海記 (21) ⑤ 新木繁雄

7月19日 紅海へ

海面は波一つなく、鏡のように静かだけど、海水温度が33℃、機関室は44℃まで上がって猛烈に暑い。こんなところでエンジントラブルでも起きようものなら、みんなダウンしてしまうだろう。幸い甲板、機関とも順調に動いている。

機関長と甲板員の散髪をしてやった。昼食前洗濯に行ったら、洗濯機の中にだれかの洗濯物が忘れられていた。昼食前もう一度行ったら、船長が洗濯物をすすいでいた。「あと5分ほどで終わる」というので、5分後に行ったら「自分の洗濯は終わったけど、他の人が洗濯機を使うかもしれないので見張っていて、洗濯に来た人に、ギャランティー（私）が順番についているから、君はその後にしろ」といつてくれたようだ。私に気を遣ってくれているようだ。ちなみに本船には洗濯機は1台しかない。

予定通り22日朝、スエズに到着するようだ。もし22日に運河通過の予定がなかったら、カイロへ観光に行こうと、C/E、武村、私の3人で話が決まった。

7月20日 紅海航行中

午前10時頃、主機ターボチャージャーの水洗いを始めたところへ「ブリッジで船長が呼んでいる」とボーイが呼びに来た。船長が呼んでいると聞くと、どうも嫌な予感がする。今度はどんな問題をいつてくるのだろうか。いろいろ想像しながらブリッジへ行った。

本船のすぐ後にできた姉妹船のベルアベス号のギャランティー・エンジニアの蓼内君からVHFが入っていた。でもいろいろチャンネルを切り替えてみたが、すべて話し中で通話できず、メインラジオのSSBで呼び出してもらい、ようやく交信できた。今朝、スエズ運河を通過してきたようだ。

この前の日本停泊中、会社から来た人に話を聞いたが、彼はものすごく苦労しているらしい。同じ図面でできた船だから、トラブル箇所もB I S K R Aと同じ。アンカーしかり、ツインクレーンしかり、発電機しかり。彼はあまりにも几帳面すぎて、すべてがパーフェクトでなければ我慢できないらしい。「機関の不調具合はこちらの責任だけど、運転には何ら責任はないのだから、やり方だけ教えて、後はやろうがやるまいが、あちらに任せておけばよい」とアドバイスした。

20分ほど話したら、ちょうど無線士が天気図を撮る時間になったので、もっと話したいことがたくさんあったけど、交信を打ち切らざるを得なくなった。午後また交信を試みたが、遠く離れすぎて雑音ばかり多く、話が聞きづらくなってしまった。

「海員だより」